

# ストロンチウム計測短縮

## 高員福大准教授ら新技術開発

### 第一 原発 廃炉 加速へ期待

福島大共生システム理工学類の高員慶隆准教授は、東京電力福島第一原発の廃炉作業で発生した汚染水に含まれる放射性ストロンチウムの濃度分析で、従来の方法より数値の正確さを高める新技術をパーキンエルマージャパン(横浜市)と共同開発し、特許を出願した。十一日、福島市の

同大で記者会見した。高員准教授によると、新技術は雨に含まれる放射性ストロンチウムの計測で使っていた技術を発展させて開発した。従来の分析法は三回の測定が必要で、汚染水の状態の変化や分析器の劣化などの影響を受けていた。新技術は分析器具を改良し、一回の測

定で三回分の数値が得られるようにした

め、従来より早く正確な結果を得られるという。

原発の高濃度汚染水や原発建屋周辺の井戸「サブドレン」の地下水分析にも応用できる見通しで、高員准教授

は「これまで以上に正確な値をより短時間で計測できる。福島第一原発の廃炉加速化にもつながるはず」と語った。

放射性ストロンチウム濃度分析の新技術開

発について東京電力福島広報部は「分析工程が当社とは違うため一概には言えないが、廃棄物低減の効果が期待できることから、今後採用を検討していく」とコメントした。